

『蒙古字韻』複製本の種類と特徴

吉池孝一

1. 種類

元の朱宋文による校訂の序(至大戊申・1308年)が付された『蒙古字韻』の抄本が、ロンドンの大英図書館に所蔵されている。これを倫敦抄本と称する<sup>1</sup>。倫敦抄本は現在知られているたった一つのテキストであり、欠筆などから清の乾隆年間に書写されたことが分かっている<sup>2</sup>。この原抄本の写真版および模写版の複製本をつくり公刊したものとして管見による限り次の5種がある。

- ①壺井義正(1956)『影印大英博物館旧鈔本蒙古字韻二卷』,大阪:関西大学東西学術研究所。
- ②羅常培・蔡美彪(1959)『八思巴字與元代漢語〔資料彙編〕』,北京:科学出版社。
- ③照那斯圖・楊耐思(1987)『蒙古字韻校本』,北京:民族出版社。
- ④韓国学中央研究院研究處編集(2008)『蒙古字韻』,城南:韓国学中央研究院。
- ⑤鄭光(2009)『蒙古字韻研究:訓民正音과 파스파文字의 關係를 解明하기 爲하여』,ソウル:博文社; 曹瑞炯訳(2013)『蒙古字韻研究—訓民正音與八思巴文字關係探析』,北京:民族出版社。

①は原抄本の写真複製本。石浜純太郎氏が1921年に撮影したものに拠るといふ。②は1938年以前に于道泉氏がロンドンで撮影したとされる写真に拠った模写本。写真が不鮮明なため模写としたといふ。但し書影として写真も4こま掲載されている。虫損等による欠落部分は、正確に模写するのではなく、或ものは筆者の判断により復元がなされ、また或ものは筆画の一部が残っていても完全な空欄としている。③は①壺井義正(1956)を再複製した写真複製本であるため鮮明度は落ちるけれども詳細な校定が付されており有用である。④は韓国学中央研究院より非売品として300部作成され2008年の国際会議において配布された写真複製本である。⑤は鄭光氏が1996年に大英図書館より入手したマイクロフィルムによった写真複製本。曹瑞炯訳(2013)は⑤の漢訳本である。

2. 5種の特徴

③は①を写真にとり複製したものであるため、鮮明度は①よりも落ちるけれども、両者は同一のもの。④と⑤は同一のマイクロフィルムにもとづくが、⑤の解像度は④よりも落ちる。

<sup>1</sup> 中村雅之(1994)にロンドン写本という呼称があり、しばらくはこれによっていたが、2008年の韓国の韓国学中央研究院における国際会議より倫敦抄本という呼称を用い始めた。

<sup>2</sup> 尾崎雄二郎(1962)による。

この5種について、特徴によって表示すると次のとおりである。

	裏打ち	義注“雨也”(下5右4)	韻字“甌”(下21左10)
① (写真複製)	無	無	無(一部分有り)
② (模写)	不明	無	有
③ (写真複製)	無	無	無(一部分有り)
④ (写真複製)	有	有	有
⑤ (写真複製)	有	有	有

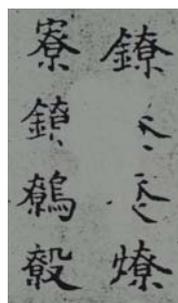
### 3. 裏打ちの有無

倫敦抄本を実際に見てその体裁を報告したものに橋本萬太郎(1971)がある。そこには次のような裏打ちに関する記載がある。

本文は茶色の渋紙 [後に述べる関西大学複製本【①壺井義正(1956)】の写真が大分汚ないのはこの色のせいであろう] に職人的に見事な筆で墨書されており、現装では全部白紙で裏打ちされている。関西大学の東西学術研究所は1956年にこの抄本の写真複製本を刊行されたが、その複製本にも見られる通り、下冊に虫食いがある。その虫食いは、今は亡き先輩石浜純太郎先生が丁度半世紀前に外遊された折に写真撮影されたのと寸分たがわず、先生も親しくこの書を手にしたのかと思うと、これは私事にわたるが、筆者は原抄本をひもときながら胸をしめつけられるような懐かしさにおそわれた。(2頁)「現装では全部白紙で裏打ちされている。」とあるのは、下に示した右の写真“改装後の倫敦抄本”のような状況について述べたものであろう。



①壺井義正(1956)下15b6



改装後の倫敦抄本<sup>3</sup>

①壺井義正(1956)は虫食いを通して次の葉が見える。これより、写真を撮った時点では、白紙の裏打ちがなされていなかったことがわかる。①の写真複製本は石浜純太郎氏が1921年に撮影したものに拠るといふから、すくなくとも1921年(撮影年)から1971年(橋本氏報告)の間に大英図書館において裏打ちされ現在の装丁となったことになる。「その虫食いは、今は亡き先輩石浜純太郎先生が丁度半世紀前に外遊された折に写真撮影されたのと寸分たがわず」とあるがこの写真によるかぎり、改装後の欠落はやや大きくなっている。②羅常培・

<sup>3</sup> 1994年、大英図書館より入手したマイクロフィルムによる。

蔡美彪(1959)は1938年以前に于道泉氏がロンドンで撮影したとされる写真に拠った模写本であるが、拠り所とした写真の原抄本が裏打ちされていたものであるか否かは不明である。

なお、現在大英図書館に所蔵されている原抄本および大英図書館より供給されるマイクロフィルムは裏打ちなどの改装が施されたものであり、改装前の状態は今となつては①壺井義正(1956)の写真複製本でしか知ることができない。その点で、この写真複製本は、パスパ文字と『蒙古字韻』の研究史にとって貴重な資料ということになる<sup>4</sup>。

①と②の関係については次節以降で述べる。

#### 4. 義注“雨也”の有無

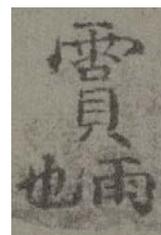
大英図書館の原抄本の下巻第5葉b(右)4行目の最下の韻字“賈”には義注“雨也”がある。しかし複製本の①壺井義正(1956)と③照那斯圖・楊耐思(1987)には義注“雨也”はない。“雨也”は①③の写真の枠外となつてしまっている。ネガフィルムもしくは紙焼きの段階で不都合が生じたのであろう。興味深いことに②羅常培・蔡美彪(1959)の模写にも義注“雨也”がない。このような共通した欠落が偶然に生じることはない。①と②は同一のネガフィルムもしくは紙焼きによつたものである<sup>5</sup>。④⑤には“雨也”はある。



①壺井義正(1956)



②羅常培・蔡美彪(1959)



④韓国学中央研究院(2008)

#### 5. 韻字“甗”の有無

大英図書館の原抄本即ち倫敦抄本の下巻第21葉a(左)10行目の最後には韻字の“甗”がある。しかし複製本の①壺井義正(1956)と③照那斯圖・楊耐思(1987)の当該ヶ所は消えており“甗”と認めることは困難である。いっぽう②羅常培・蔡美彪(1959)の当該ヶ所には“甗”が模写されている。前節で①と②は同一のネガフィルムもしくは紙焼きによつたと述べたことと相反するように見える。しかしながら初期のネガフィルムもしくは紙焼きの段階では読

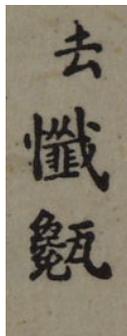
<sup>4</sup> 以上は吉池孝一(2008)を参照。

<sup>5</sup> この点についてはかつて吉池孝一(1995)で述べ、①と②の違いについては次のように考えた。「一つの可能性として私は以下のように考えている。これまで両本は別々に撮影されたものと信じられてきたが、実は関西大学の写真複製本【①】の写真と北京の影抄本【②】のもととなつた于道泉氏の写真は、同一のネガフィルムに基づくものではなかろうか。北京の影抄本には書影として写真が4こま掲載されているわけであるが、これと関西大学の写真複製本を比較してみると、関西大学本には画面の左上に白い長方形の紙片のようなものがついておりページを示す算用数字がふられている。これは原抄本にも影抄本の書影にもみられない。関西大学本の白い紙片のようなものは、写真を整理するため後に張り付けたものと考えてさしつかえない。それ以外は、両者を同一のネガフィルムに基づく想定して不都合が生じるような部分は見あたらない」。

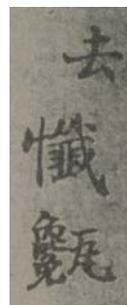
み取ることができたのであるが、①にあっては後の段階で何らかの過誤により不鮮明となったとすることができる<sup>6</sup>。④⑤には“甌”はある。



①壺井義正(1956)



②羅常培・蔡美彪(1959)



④韓国学中央研究院(2008)

参考文献（発行年順）

尾崎雄二郎(1962)「大英博物館本蒙古字韻札記」,『人文』(京都大学教養部)8:162-180。

橋本萬太郎(1971)「ブリテン博物館旧抄本蒙古字韻雑記」,『AA研通信』14:1-4。

中村雅之(1994)「『蒙古字韻』と『古今韻会举要』」,『富山大学人文学部紀要』20:147-163。

吉池孝一(1995)「『蒙古字韻』のロンドン写本とその複製本」,『語学研究』(拓殖大学語学研究  
所)78:197-208。

吉池孝一(2008)「蒙古字韻の改装などについて」,『KOTONOHA』65:11-12。

---

<sup>6</sup> 以上は吉池孝一(1995)による。